

おにいさん

パンツ



五華内しびよ

ぜんぶで3枚。ママが、タンスのいちばん下の引き出しに、新しく買ったパンツをしまっけて行きました。

「だれだ！」

「えーと、ぼくは、時計（とけい）」

「わたくし、帽子（ぼうし）ともうします」

「おれは、グラサンだけど」

ヒマワリみたいなうで時計。

青いチェックの野球帽（やきゅうぼう）。

あとはブルースブラザーズがしていたみたいな黒めがね。それぞれちがうイラストが、プリントされています。

「おしゃれシリーズだな」

そう聞きかえしたのは、3枚よりもちょっと小さなパンツ。すぐ横にたたまれていて、真っ赤（まっか）なバイクのプリントが、ずいぶんと色あせて見えました。

「わしは、ライダー。のり物シリーズだ」

「あっ、はじめまして」

かさねられたいちばん上で、時計が言いました。

「この家の、トモ君のパンツになって、2か月以上がすぎたかな。わしらも3枚組で、他にヨットと、宇宙（うちゅう）ロケットがっしょだよ」

「ぼくら、だれのパンツになるのでしょうか？」

「3つ上のお兄ちゃんもいるが、ここはトモ君の引き出しだから。やっぱり、君らもトモ君のパンツだろうな」

「ぼくらは、ライダーよりも大きなサイズにできていて、それでもっしょかなあ……」

「子供はどんどん成長するんだ。最初はブカブカでも、それが今ではピッタリなもの」

ライダーはそう言うと、少し悲（かな）しそうな顔をしました。（顔がどこかって、考えこまないでくださいね。）

「わっ！」

そのとき急に引き出しがあいて、時計がどこかへつかみ出されて行きました。

「さっそくはいていただくのでしょうか？」

上の時計がいなくなり、帽子が顔を見せました。（顔というか顔ではなくて……。）

「いや。ママがいちど洗濯（せんたく）をして、それからだもの。それにあの手は、ママじゃない」

「ええっ」

しばらくたって、時計がよれよれにたたまれてもどってきました。

「サイズが違（ちが）ってる。ぼくらはきっと小さすぎるんだ。あと少しでやぶれるかと思ったよ」

時計が、戸惑（とまど）うようすで言いました。

「君をはいたのは、トモ君のお兄ちゃんだよ。弟の買い物がうらやましくて、だからはいてみたかったんだ」

ライダーのことばに、時計も帽子もグラスも「はあ」と、うなずきました。

「じゃあ、トモ君が次にはくのは、ライダーってこと？」

グラサンが、いちばん下でもごもご尋（たず）ねます。

「いや。わしは、ゴムが少しのびてしまってな。今はここで、留守番（るすばん）をしているよ。おもらしした時なんかの、着がえ用としてな」

ライダーは、また悲しそうな顔になりました。（たたんだシワが、そう見えます。）

「だけど思い出すなあ。トモ君が紙おむつをとって、初めてはいたパンツが、わしでな」

ライダーの悲しい顔は、むかしをなつかしむやさしい顔に変わりました。（シワです。）

「最初は、うまくトイレに行けなくてな。家では失敗（しっぱい）しても、すぐ洗濯してもらえるから良いが。いつか遊園地（ゆうえんち）へ行ったときなど、ウンチといっしょにビニール袋（ぶくろ）に入れられて、家に着くまで、そりゃあ臭（くさ）いたいへんだった」

「ええっ」という顔を3枚がすると、それを横目（よこめ）で見ながらライダーが話を続けます。

「でも今はだいじょうぶ！ トモ君もじょうずになって、おかげでわしの出番（でばん）も無くなった。だから君たちには、感謝（かんしゃ）してもらわないと」

「のり物シリーズのみなさんのおかげですね」

「トモ君もママも、わしらのことを〈おにいさんパンツ〉とよぶんだ」

「おにいさんパンツ」

「紙おむつが卒業（そつぎょう）できて、赤ちゃんからお兄さんのなかま入りをした証拠（しょうこ）だから。その最初の手助（てだす）けを果（は）たしたのが、わしらってことだ」

3枚は話を聞きながら、色あせた真っ赤なバイクを、まぶしそうにながめました。

引き出しの中ですごす間、ライダーの他にヨットや宇宙ロケットとも会うことができました。

2枚はとてもしがしそうで、ライダー以上によれよれに見えたけれど、トモ君の事などをかわりばんこに教えてくれました。

そして、ついにおしゃれシリーズの3枚は、そろって引き出しを出て、ママに洗濯をしてもらったのです。

よい香（かお）りの泡（あわ）の中で、さっぱりしたら、ぽかぽかの日の下、うたた寝（ね）をしながら乾（かわ）きました。

そのとちゅう、ヨットをはいたトモ君が、お兄ちゃんと庭（にわ）に出て、近くで遊（あそ）ぶ姿（すがた）も見られたのです。

3枚は、なんだか楽しくなって、今日あった出来事（できごと）を、早くライダーにおしえたいと思いました。

夕方（ゆうがた）になって、バスタオルにのせられた宇宙ロケットと別れ、引き出しにもどると、なんと、どこにもライダーの姿がありません。

いつかこの日が来ることを、しかし、3枚とライダーも覚悟（かくご）していました。

「さあ次は、ぼくらの番だ。ライダーの分もがんばろうぜ！」

時計が、せいっぱい大きな声で言うと、その下でたたまれた帽子とグラスが「わかっているさ」と、静（しず）かにうなずきました。

（おわり）